



233号

2018 / 5 / 1

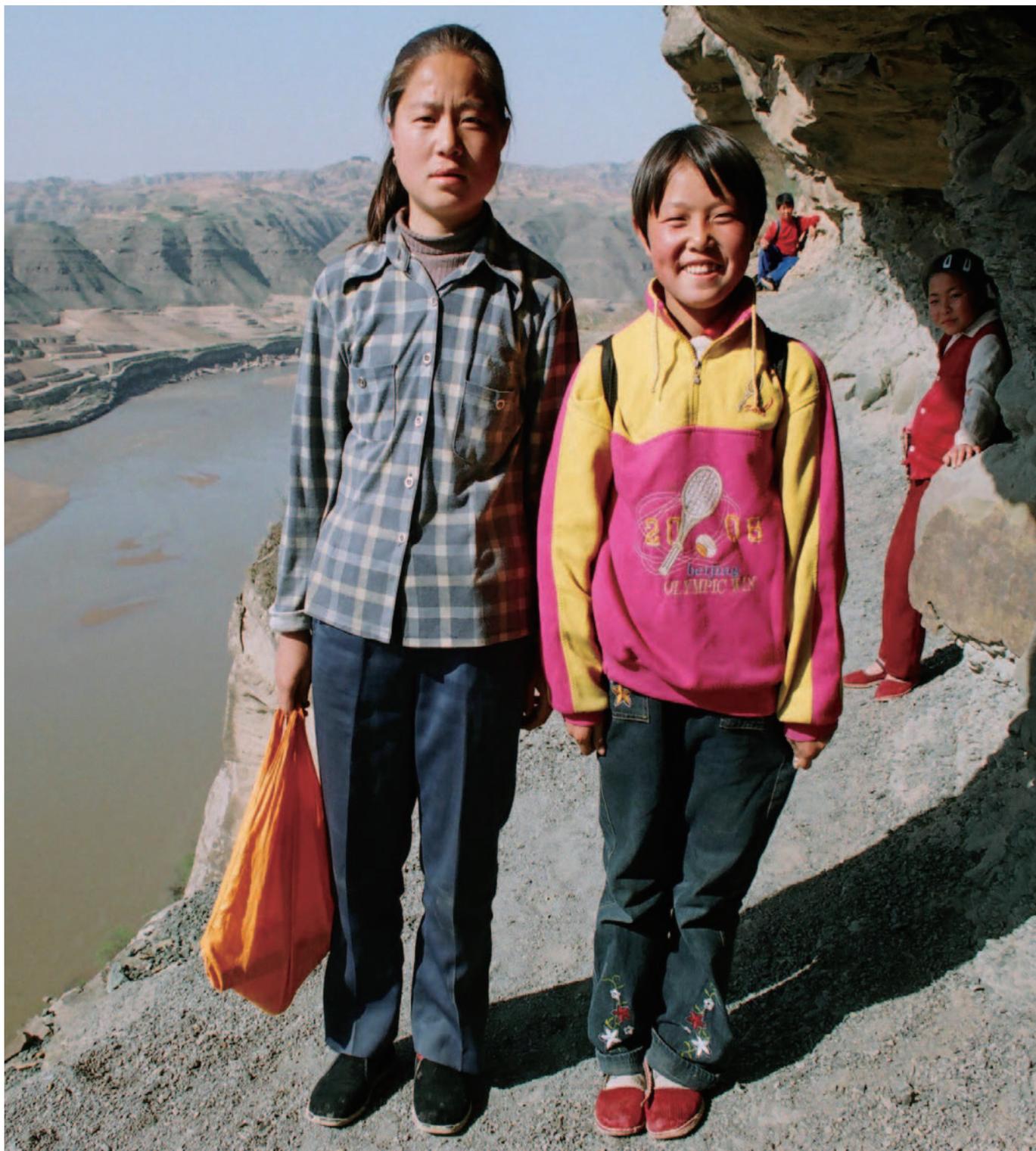
日中文化交流市民サークル‘わんりい’

〒195-0055 町田市三輪緑山2-18-19 寺西方

☎044-986-4195

<http://wanli-san.com/>

Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



黄河の脇の通学路 陝北黄土高原のど真ん中、黄河が180度向きを変えて流れる近くに伏羲河村^注と呼ばれる村がある。陰陽のシンボルを考え出したという伏羲はこの村で生まれたと伝えられている。21世紀初頭、子どもたちは、3年生になると20km離れた郷の小学校に寄宿して学ぶ。携えるのは教科書の他に一週間分の食料もある。雨の日も風の日もある。道中には黄河の崖沿い幅1mもないような隘路も何か所かあるという。

(注)清代以前は伏羲河村と呼ばれていた。現在は“羲”を用いて表記される習わしとなっている。(2003年3月、周路氏撮影)

今月は、《漢書》に出て来るお話です。日本では、このままの形ではあまり使わず、同じ意味を、「公平無私」とか「公明正大」とか言いますね。



春秋時代、晋の平公が大夫(古代の官職名)の祁黄羊きおうように訊ねました。「南陽県の知事に欠員が出たが、誰を派遣したらいいだろうか?」

祁黄羊は、自分と敵対する解狐に知事としての能力があると考えて、解狐を推薦しました。果たして、解狐は着任後、土地の人々の為に多くの善政を行い、皆から褒め称えられました。

暫くして、平公は又、祁黄羊に訊ねました。「現在、朝廷の裁判官が一人不足している。誰にこの職を担当させたらいいだろうか?」

祁黄羊は、自分の息子である祁午を推薦しました。祁午もやはり就任すると、仕事を正確にこなし、人々の賞賛を得ました。

この二つの話を聞いた孔子は、「祁黄羊こそ、大公無私(公明正大)な人だ!」と褒め称えました。

語の説明では:「公は公正のこと。やることが公正で、私心の無いこと」です。

使用例文は、「包拯(北宋の名臣)は清廉潔白、大公無私な人である」です。



皆さんは、このお話を聞いて、どう思われますか? 私は、これで「大公無私」と言うのに、違和感を覚えました。それで少し調べてみると、子供向けに簡略化したせいで、少し説明不足であることがわかりました。

元のお話では、祁黄羊から解狐を推薦された平公が、「解狐は、お前と敵対しているのではないか?」と言うと祁黄羊は、「解狐が南陽県の知事に適任なので推薦したまでで、敵味方は関係ありません」と答えました。

また、裁判官の時も、平公が「息子を推薦したのでは、周囲の者に変に思われないか?」と言うと、彼は、「裁判官に相応しい人間をとお尋ねなので祁午とお答えしま

した。息子かどうかは関係ありません」と答えました。

孔子のコメントも、「祁黄羊は、才能を的確に見抜いて、周りの状況にとらわれず、適材適所に推薦をしている。彼こそ、本物の大公無私の人だ」と言うものでした。

実は、最近聞いた話で、同じように違和感を覚えたものがあります。日本の「大岡裁き」の中国版のような話なのですが、正確には、「大岡裁き」が中国の公案小説(裁判物語)を参考にしているのです。

明代の白話小説を集めた《滕大尹鬼断家私》と言う本に、滕大尹と言う名裁判官の話があります。ある時一人

の男が親の遺言だと言って、一幅の掛け軸を持ち込んで、親の遺産の分配を依頼して来ました。

滕裁判官が掛け軸を預かって調べると、簡単な仕掛けで、男の親の遺言書が見つかりました。そこには、兄が欲張りなのを心配した親が、蔵の右の壁に銀の壺5個、左の壁には金の壺5個を埋め、兄には右側の銀の壺を、弟には左側の金の壺を遺産として残すと書いてありました。



滕裁判官は、兄弟を呼び出して言いました。「お前たちの父親の遺言書を見つけた。それによると、蔵の右の壁に埋め込んである銀の壺5個は兄がとるように、左の壁に埋めてある金の壺5個のうち4個は弟が取り、残りの1個は裁判官が取るように」と書いてある。早速、遺言書の通りに分配するように」と言い渡しました。

大岡越前守にこのような振舞いがあると、日本人は承知しませんが、中国では、名判決と言われています。欲張りな兄は、自分が壺5個をとり、弟より自分の方が多いいので満足、弟は金の壺4個で満足、滕裁判官も金の壺1個を手に入れて満足。三方が皆満足するのだから良い判決なのです。

中国の人達の考え方には融通性があって、何でも黒白ははっきりさせないと気が済まない日本人とは違います。こんなところが、中国人は懐が深いと言われる所以かもしれませぬ。

Wú suǒ bú zhì
无所不至

至らざる所無し

うえだあつお
桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

孔子の生きた春秋時代と、それに続く戦国時代は、久しく続いた封建体制のタガが緩んで、下剋上の風潮が日常化した時代でした。中国史上まれに見る混乱の時代でしたが、一方、一部の知識人たちにとっては、混乱あるが故の行動の自由が許されていました。許されていたというより、そういう隙間が生じた時代であったと言った方が良いかもしれません。

ここでいう一部の知識人とは、相当の能力を持ちながら、戦乱や権力闘争の煽りを受けて国を追われ、仕官を求めて各地を流浪する人たちのことです。当時はこういう人たちが全土に溢れていました。孔子もその一人でした。中には孔子やその弟子たちのように、高い理想を掲げて主君を説得し、理想の国家を実現しようとする人もいましたが、一方、個人的な野心の為だけに仕官を求める人たちも少なからずいました。

こういう状況を踏まえて、孔子は次のように言っています。「鄙夫可与事君也与哉！(Bǐ fū kě yǔ shì jūn yě yú zāi!)」(鄙夫は与に君に事うる可けんや)〈陽貨第十七〉。下司の輩と一緒に主君に仕えることができるだろうか、と。「鄙」とはもともと地域集団の呼称で、村や集落を表わす言葉でしたが、後に文明の届かぬ遅れた地域を指すようになりました。「鄙夫」とはそういう地域に住む人という意味でしたが、後に無学な人、または道徳観念の乏しい人を指すようになりました。ここでは後者の意味です。「～也与哉！」は強い疑念を伴った反語表現です。道義心に欠ける連中とはとても一緒にやっていけないということです。結果として孔子はせっかく手に入れた魯の国の高官の地位を棄て、新しい働き場所を求めて周遊の旅に出たのです。そしてこの旅は生涯続きました。

孔子の言葉は続きます。「其未得之也，患得之。(Qí wèi dé zhī. yě, huàn dé zhī.)」(其の未だ之を得ざるや、之を得んことを患う)。そういう人たちは、これを手に入れる前は、手に入れようと心を砕く。ここでいう「患」とは、そのために心身を労することです。では「之」とは何でしょう。ここでは富、地位、権力などが考えられます。彼らはこれらを手に入れるためには骨身を惜しみません。そして首尾よく望みを果たした後はどうなるのでしょうか。

言葉はさらに続きます。「既得之，患失之。(Jì dé zhī, huàn shī zhī)」(既に之を得れば、之を失うことを患う)。得たいものを得た後は、これを守ることには心を砕きます。

不純な目的で手に入れたものは、たとえその手段が正当なものであったとしても、これを守る時には手段を択ばない。もしこれが権力であったら、なおさらのことです。権力を得たいと願っている段階では、権力を持たないが故に、これを得るための選択可能な手段は限られています、しかし、一たび権力を握ってしまうと、これを守る手段は無限に広がります。

そこで孔子はこう結んでいます。「苟患失之，无所不至矣。(Gǒu huàn shī zhī, wú suǒ bú zhì yǐ)」(苟も「之」を失わんことを患うれば、至らざる所無し。)一度手にした権力を守るためには、手段を択ばず何でもやってのけるものだ、と。

これはもう古代中国だけに限られたことではありませんね。現代の政治にも十分当てはまる話です。ちなみに「无所不至」は、現代中国語では「やりたいことなら善悪にかかわらず、何でもやってのける」という意味の四字熟語として使われます。

(わりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

3日目(10月21日)の朝が来た。今日は樂山大仏を見に行く日だ。それから夕方までに樂山から宜賓まで行く予定である。朝9時に予約してあったタクシーが「峨眉山瑞邦莫麗酒店」前に到着。一路ホテルから東方の樂山市に向かう。樂山市は、成都からは南に160キロメートルの所にある。10時頃、樂山大仏への遊覧船が出る場所に到着した。ここからは樂山大仏は見えない。この場所は、都江堰を流れて来る流れの早い岷江の船着き場である。接岸している船は200人くらいは乗れる結構大きなもので、2階建てになっており2階がデッキである。幅の広い川の向こう岸は、赤茶けた絶壁が続きその先の大仏の存在を想像させる。峨眉山市から樂山市までのタクシーから見える景色はずっと赤っぽい色の土である。

さて荷物をそばの預かり所に預け、遊覧船の切符を購入する。一人70元だ。我々は早速2階のデッキに上がる。顔に川風があたり気持ちがいい。天気は曇りだが薄く霧がかかっている。まもなく船は岸壁を離れた。川の流れは速く風景を楽しんでいるとすぐに大仏が現れてきた。スマホを構える間に船は下流に行ってしまう。何しろ天下の暴れ川との悪名高い「岷江」なのだ。がっかりしていると100メートルくらい流されたところで船は急に反転して上流に向かい始めた。今度は流れに逆らうので船はゆっくり進む。ちょうど大仏の前に来た時、船は流れに負けないように必死に踏ん張りながらそこに留まった。他にも2隻の遊覧船がやはり踏ん張りながら留まっている。乗船した人はここぞとばかりシャッターを切り始める。若い男女は自撮り棒で大仏をバックに我が物顔で写し始める。確かに大仏は巨大である。

樂山大仏は、弥勒菩薩をかたどって造られた高さ71メートルの摩崖仏である。摩崖仏とは、自然の丘陵の岩壁に彫刻された仏像である。この辺りは土も岩

も赤褐色をしているので大仏も赤褐色である。ただ長い年月が経っているので変色したり草で覆われている部分がある。大仏の両側には階段が伸びていて、上の方から大仏を見下ろせるらしい。高所恐怖症の私は水面から100メートルはあるところに行く気はさらさら無い。友人も霧で足元が濡れていて万一滑ったら困ると言っ行って行こうと言わないのでホッとした。それでも見ると階段には大勢の人が認められた。樂山大仏は90年もかけて803年、



樂山大仏とその前を流れる岷江

唐の第10代皇帝・徳宗の時代に完成した。今から約1200年余り前のことである。日本では、空海や最澄が活躍していた時代である。この場所になぜ巨大な摩崖仏を造ったかであるが、大きく二つの理由があると言われている。一つは、樂山地方は昔から塩がたくさん採れ、それが町の経済を潤していたらしい。それに感謝する意味があったこと。もう一つは、この辺りは洪水に悩まされており仏像

を建立し水の神様の怒りを鎮めようとしたことである。実際削った岩石を前の川に大量に捨て、浅くなった川は洪水が無くなったと言う。この辺りは、世界遺産で有名な都江堰を流れる「岷江」が都江堰市で成都平原に出て、眉山市を貫き樂山市で「大渡河」と合流するため水量の多い時期は洪水で人々を苦しめたのである。このシリーズでよく登場する「岷江」は、四川省北部の岷山山脈に発する全長735キロメートルの大河である。日本一の信濃川でも全長367キロメートルで、その丁度2倍でありかなりの長さである。岷江は最終的には明日行く宜賓市で長江に合流する。

大仏の高さは、71メートルと書いたが、像の本体の高さは60メートルである。752年、聖武天皇の時に開眼供養された東大寺の大仏は14.7メートル(過去2回焼失している。これは現在の大仏)、鎌倉の大仏は11.4メートルである(いずれも台座部分の高さ



都江堰により岷江は穏やかな流れに

を除く)ので如何に巨大かが分ろうと言うものだ。中国人のプライドをくすぐるのに十分な高さであろう。完成当時大仏は、「大仏像閣」と称する13層の木造建築物の中に置かれていたが、明代末期に建物が焼失し現在に至っている。

当時は多くの大仏が日本でもそうであるように国家によって造られたのに対し、樂山大仏は民衆の力で造られた。90年もかかったので親から子へ子から孫へと受け継がれていったのであろう。

我々はまた船着き場に戻り、それから宜賓に向かうため、バスセンターに行った。窓口に行くと12時10分発の「宜賓」行きの切符があったのでそれを購入した。このバスは、宜賓までノンストップで約2時間かかるというので、売店でパンや飲み物を買って待合室でそれを食べながら出発時間を待つことにする。バスは定刻に出発し、すぐ高速道路へ。一眠りして目を覚ますとまもなく到着した。そこからまずホテルに行く。ホテルは、「凱爾頓豪庭酒店」という。部屋で2時間くらい休んで、夕方外に食事に行くことにした。今日も一日無事に終わることが出来た。

ここで明日行く「宜賓市」について紹介したい。あまり聞きなれない都市である。私も友人がこの町の出身でなければずっと知らなかったに違いない。古くは「戎州」と言った宜賓市は、他の都市に無い特徴や観光地がある。この街の今の別称は、「酒都」である。中国の酒の種類はいろいろあるが、その中で「白酒」という度数の強い酒がある。中でも有名な「五糧液」という銘柄があり、これを醸造しているのが本都市である。白酒で一番の高級品は貴州省の「茅台酒」であるが、一番人気があるのは「五糧液」と言われる。

原料は、紅高粱(コーリャン)、糯米(もち米)、粳米(うるち米)、玉米(とうもろこし)、小麦の五つである。

宜賓市はまた、「万里長江第一城」とも呼ばれる。長江の最初の街ということだが、実は長江は宜賓市から上流は「金沙江」と呼ばれる。前述の通り「岷江」とこの街で合流し、長江はこの街から始まるのである。したがって第一城なのだ。長江は水源から河口の上海までを指すのかと思っていたが・・・世の中知らないことがたくさんあるものだ。信濃川が長野県では「千曲川」と呼ばれているのと同じであろう。

次に特徴的な観光地を二つだけ紹介したい。一つは宜賓市の南にある「竹海」という場所だ。文字通り見渡す限り竹、竹、竹である。あちらの山もこちらの山も竹で覆われている。流石にパンダの住む四川省だなと思いホテルからの運転手に聞くと、竹海にはパンダは住んでいないと言う。竹の生えているところはどこでもパンダがいるわけではないようだ。日本でも京都など竹林が有名などころがあるが、その規模は比較にはならない。実際に見なければ素晴らしさは分からない。

もう一つは、「夔人懸棺」である。宜賓市の南の「洛表」という町にある。この辺りは昔、夔(ボー)人といわれる少数民族が住んでいた。ネットによると、次のように解説している。【BC10世紀頃から歴史に現れ始め、一時は四川省、貴州省あたりで相当の勢力を持った。しかし明代(1368年～1644年)に漢民族の支配下にはいることを拒んだため、12度に亘る攻撃を受け最終的に1573年の戦闘で滅亡した】とされる。末裔も確認されていないというから徹底して殺戮したのであろう。この民族には特異な習慣があった。それは絶壁の高い場所に木の杭を打ち込み、二つの杭に横にし木棺を載せて死者を吊ったのだ。今でも洛表周辺に多く残されている。それが最初の漢字4文字で表現されている。つまり〈夔人の棺桶を(絶壁に)懸ける〉である。私がショックを受けたのは、漢民族がこの民族を滅亡させた上、記念碑を建て観光地としていることである。鎮魂のための式典は毎年有るのであろうか? 今回は時間がなかったので行けなかったが、いつか現地を訪れてこの目で本当の所を確かめたい。

(続く)

➤ 大宅壮一、王仁三郎に会う

出口王仁三郎(以下、王仁三郎と略す)とはいったい、何者だったのでしょうか。何万という歌詠みでもあった故に歌人ともいえるでしょう。屏風などにも大胆に毛筆で絵や書を書き、金重陶陽や加藤唐九郎など一流の陶芸家から絶賛される作品を創るという点からすれば、陶芸家と呼んでいいかもしれません。

本人は「芸術は宗教の母なり」というほど、芸術に価値を置き、

「芸術の 趣味を悟らぬ人々は
地上天国夢にも来らず」

と詠うほどであり、彼が第三者に小説と称する『霊界物語』は83巻に亘る膨大なものなのですが、外圧もあり途中で筆を措かざるを得ず、そのエネルギーはまさに凡人の域を超えています。

世間からは宗教家と見られていますが本人は、大本教は宗教ではない、とも言っています。戦後、「駅弁大学」「一億総白痴化」「男の顔は履歴書」といった流行語を生みだし、その個性的な表現でマスコミ界で大活躍した評論家の大宅壮一は戦前、京都の亀岡を訪れ、1931年「出口王仁三郎訪問記」を書いています。当時、大宅は30歳ほどです。それを読むと、王仁三郎の素顔といったようなものが良く表われています。

仲間内の大本信徒や出口家から輩出した作家や先生のような身内でない故に、客観的に王仁三郎という人間を明らかにしているかもしれません。

➤「聖師は平民的な方です」

少年時代の大宅にも王仁三郎は、「偉大なる予言者として、僕の村に近い町へやってきた」と映るような存在で、大宅は友人に誘われ、「恐怖と好奇心にふるえながら、わざわざ一里の路を町まで出かけて行ったものだ」と書いています。

「説教の内容には別に感心しなかったがそうした

あたりの雰囲気——緊張した、いわば革命的というべき空気が僕を引きつけた。そのなかにひたっていると、近い将来になにか大事件、この世の中が、ひっくりかえるような大事件が起こりそうな気がしてくるのだった。そして多感の少年の胸は、漠然とした大恐怖でおののきながらも、どこかでそれを待ち望んでいるようにも感じられた」と記しています。その時の大宅の友人はすっかり大本教に魅せられ、信者になり宣伝使(布教師)になったそうです。

亀岡の宿で一休みして大宅が、宿の人に紹介状もなしに王仁三郎が会ってくれるだろうかと言うとその人は、「ええ、会って下さいますとも! 聖師様(王仁三郎のこと)はそれはそれは気軽な、平民的な方でして、このあたりへもよくご散歩にお出ましになりまして、わたしどもつかまえてよく冗談口をおききになりますわ」と言うのだった。

➤「大本は宗教ではない」

「王仁三郎聖師は、浴衣の上に縞の羽織を引っかけて、頭には妙な烏帽子のようなものを頂いているでっぴり太った、がっしりした体格の大男だ。年齢は六十歳以上らしいが、どこか全体に若々しい元気がある。顔も、声も大きい。一口に言えば善良な牡牛の感じだ」

王仁三郎と大宅の会談の席には若い信徒らがつめかけ、二人の会話を書き留めようとしています。大宅はその中で、短歌や『霊界物語』などについて聞いた後、次に、この怪物に向かって、当時盛んだった反宗教運動に関する意見を聞く機会をとらえました。

「反宗教? わしの方は大賛成じゃ。もともとわしの方は昔から反宗教で押し通して来たんじゃからな」

「でも、大本教だって宗教の一種である以上は、反宗教運動の対象になるんじゃないですか?」

第23回 出口王仁三郎とは何者か?
ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後口中関係史』

大類 善啓(おおるいよしひろ)

混沌の時代を拓くザメンホフの人類人主義「私は人類の一員だ!」

「いや、大本は決して『宗教』じゃない。『大本教』というのは、いわば新聞辞令で、わしの方は『大本』といってるだけじゃ。『大本』は、政治も、経済も、芸術もみんな引っくるめた、宇宙の大本を説いているのであって、現在ある『宗教』のようなけちなものと違う」

王仁三郎はこの時、本願寺その他の既成宗教の腐敗堕落を罵って、大いに新興宗教の意気込みを見せた。大宅は書く。そして既成宗教に対する大本の戦闘的な態度を、王仁三郎の歌に表れている、と次の3つを挙げています。

- 宗教は数多あれどもおしなべて営利会社の変名なりけり
- 宗教に美名にかくれ曲神は人の汗吸いあぶら飲むなり
- 宗教は牧師僧侶をふりすてて人の心の奥底に棲む

➤ 人を縛らない教祖

戦前、アメリカのハーバード大学に留学し、日米戦争の勃発によって帰国せざるを得なかった、今は亡き鶴見俊輔は戦後、『思想の科学』などを刊行し、独自の市民的な思想活動を展開し新興宗教にも関心を寄せました。その鶴見は、日本の教祖には人を縛る人と、人を縛らない人がいて、その多くは人を縛る教祖が多い。しかし、王仁三郎は人を縛らない教祖だから好感を持てる、と書いているのを読んだことがあります。

私が王仁三郎に会った古い大本信徒に話を聞くとみな、その大らかな王仁三郎の人柄に魅せられています。

戦後も多くの人たちが、人生相談などを含めて王仁三郎に面会を申し入れました。天衣無縫な王仁三郎は、時にふんどし一つで現れたりしたようです。

今でも古い宣伝使から私が直接聞いた話で印象深かったのは次のようなエピソードです。

銀行に勤めていたある紳士が王仁三郎に面会を求めました。男は王仁三郎が現れるとすぐさま「17歳になる息子のことで相談に参りました」と言ったところ、王仁三郎は、「あんた17年前に何した？」

一喝しました。男はそう王仁三郎に言われると、ぶるぶると震えました。17年前に銀行で不祥事か何かあったのでしょうか。その人にとっては決して表に出したくない出来事でした。褒められたことではない、その男にまつわる事件が、今17歳の少年に思わしくない行状として現れたと私は受けとめました。今から40年ほどの前のことですが、実に新鮮にその話に聞き入ったことがありました。

➤ 王仁三郎の下から輩出した教祖たち

王仁三郎は1935(昭和10)年の第二次大本事件で6年8か月ほど獄中生活を強いられ、戦後の1948(昭和23)年、亡くなりました。その死までの数年間で〈耀椀〉と呼ばれる茶碗を3000個ほど創ったのですから、本当に並の人間ではでないようなエネルギーに満ちた人間でした。その広くて懐の深い王仁三郎の下から「成長の家」の谷口雅春、お光様として有名な世界救世教を立ち上げた岡田茂吉などが飛び立ち新たな教団を樹立しました。

宗教家だけでなく、合気道の創始者である植芝盛平も王仁三郎の下にいました。植芝が綾部に移住する際、王仁三郎に挨拶に伺うと王仁三郎は「武の道を天職とさだめ、その道を究めることによって大宇宙の神、幽、現三界に自在に生きることじゃ。大東流(植芝が当時所属していた合気柔術)も結構だが、まだ神人一如の真の武とは思われぬ。あんたは、植芝流でいきなされ」と語ったということです。

そして大本に入信し王仁三郎の側近として1924年、王仁三郎が蒙古入りした際には、ボディガードとして王仁三郎を守りました。

王仁三郎は植芝に多大な影響を与えました。合気道という命名も王仁三郎がつけたという説もあり、また王仁三郎は、合気に愛気を掛け合わせて、気を愛することの意味を示したようです。

植芝は道場で、出口なおのお筆先の冒頭の言葉、「三千世界、一度に開く梅の花」と声を出して手を開き、続いて「梅で開いて松で治める」と述べて手を結ぶ動作をしていたそうです。

鶴見俊輔が言うように、人を縛らなかった王仁三郎の下から多くの人材が飛び立ちました。

東西文明の比較(24)

▼長安・洛陽への旅▲

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

前回は述べましたが、日本と中国の正式な国交は、4世紀末から5世紀末の「倭の五王」時代、7世紀初期から9世紀末までの約200年続いた「遣隋使・遣唐使」の時代、そして15世紀初頭から150年続いた「日明貿易」の時代だけです。使者は、いずれの時代も日本海の荒波を渡っての渡航でした。そうした命がけの航海を可能にしたエネルギーはどこから生まれたのでしょうか。中国、更にその西方の文化を吸収したいという飽くなき熱意がそうさせたのではないのでしょうか。というわけで本稿では、「遣唐使」時代の

航海について述べてみようと思います。

600年に第1回遣隋使が派遣されました。それから約200年間続いた「遣使事業」は、それなりに造船技術や航海術の進化をもたらしました。

この進化の過程を前回同様に、200年間を三つに区分してみます。第1期は630年の第1次派遣から669年の第7次派遣まで。第2期は702年の第8次から777年の第16次まで。第3期は779年の第17次から838年の第19次まで(第20次は菅原道真の上奏により遣唐使を廃止)。遣唐使の旅は3つに分かれていました。まず第1は都から難波に出て北九州まで、第2は北九州を出発して大陸まで、第3は大陸上陸後の旅です。

🏰 北路——新羅道の時代

第1期の遣唐使は、都の飛鳥から難波津(旧大阪湾)までは大和川が利用されました。遣唐使船の出港地は、難波津でした。基本の航路は、往復とも朝鮮半島経由(新羅道)でした。朝鮮半島の西岸をまわり、現在の仁川を経由して、黄海・渤海を横断して山東半島の登州(煙台)に上陸。その後は陸路で洛陽→長安へ。この渡海ルートは、倭が大陸と交渉

を持ったとき以来のもので、長期の旅ですが、安全性の高いルートでした。船は2隻でそれぞれには120名ほど乗船していたといわれています。造船する「大匠(舟大工)」は、百濟から呼び寄せて安芸(広島県)で作ったり、百濟から買い求めたものを使っていたようです。

🏰 南路——五島列島を経由する

第2期に入り、大宝の使節(第8次:702年)以降になると、1回の渡航は400～500人に膨らみました。船も4隻になりました。渡海航路は、北九州五島列島から東シナ海を横断して直接杭州や寧波を目指すルートです。このルートに転換した理由は、朝鮮半島の情勢によるものです。親日的であった百濟・高句麗が相次いで唐と新羅に滅ぼされ、さらに唐と新羅が対立。新羅は唐との対抗上、7世紀末の一時期、倭に接近しましたが、8世紀になると、両国は外交的な対立関係に陥りました。そうした状況下では、新羅ルートをとるわけにはいきません。そこで独自ルートでの遣唐使派遣を目指し、南路を採用したのでしょう。

🏰 陸路、洛陽・長安を目指す

南路をとった第2期以降の使節は、中国に到着してからの旅程も、北路をとっていた第1期の使節とは異なります。南路の場合、到着地は、長江を挟んで北は現在の江蘇省、南は福建省に至る沿岸になります。当時の航海術では、ピンポイントで到着地を決められなかったのです。4隻の一団の到着地がバラバラだったということもありました。そこで一行は、揚州など到着地に近い大都市に集結させられ、そこから長途の大陸旅行を経て、洛陽・長安に到着、ということになったのです。揚州から洛陽までは、中国の南北を結ぶ大運河が開かれていましたから、その間は舟行が原則でした。この旅は、2～3か月を費やしたようです。

🏰 天平4年の使節の場合

では使節は、どのような旅程を過ごしたのでしょうか。正史に残る具体例を取り上げてみましょう。天平の使節は、天平4年(732)8月17日に任命されました。大使は多治比広成(たじひのひろなり)、

副使は中臣名代(なかとみのなしろ)、判官は田口養年富(やねふ)などの一団。

大使の多治比広成は「従四位上」の位を持っていました。ちなみに、第2期以降の遣唐使は、このように「四位」の大使を頂くのが例になりました。「遣唐使」という組織は八省^注クラスの格付けになります。

同年の9月4日には、近江・丹波・播磨・備中の4国に命じて、遣唐使用の船を4隻作らせています。このように遣唐使船は、地方に命じて作らせることが慣例でした。これらの国以外に、周防・安芸などがありますが、いずれも良材に恵まれ、完成した船を難波に回航するにも都合がいい国が選ばれていました。一方、翌天平5年3月21日には、大使の多治比広成らは参内して、出発の挨拶をしています。これに先立ち、多治比広成は山上憶良宅を訪問し、出発を寿ぐ「好去好来(ごきげんよう、どうかご無事で)歌」を贈られました。

8月、蘇州に到着

朝貢の役を担う遣唐使は、「朝賀使」として、唐の都で行われる元日朝賀の儀礼に参列することが原則でした。そのためには、航海、大陸での旅程を計算して出航する必要がありました。遅くとも、現在の9月ごろまでには出発しなければなりません。この時期は、航海に適した時期とはいえませんが、この船団は無事、8月には蘇州の管内に到着しました。

当時の記録によると「八月是月、日本国の朝賀使、真人広成、僊従五百九十と舟行して、風漂に遇い蘇州に至る」と。

総勢590人とは多すぎないか、と思われそうですが、当時の帆船は、無風状態の時は水手(かこ:漕ぎ手)に頼らなければなりません。おそらく、その半数は水手だったのでしょう。バラバラに到着した各船の乗員は一か所に集められ、水手たちを残して蘇州に向かいました。日本使節の報を受けた中央からは、通事舎人の韋景先が派遣され、使節を慰労しました。中央からの使いが直接で迎えることは珍しいことでしたが、詳しい理由はわかりません。

厳しい入京制限

「海外諸藩進貢使、下従有らば、其の半ばを境に留めよ」。この一文は「新唐書」に書かれたものです。藩夷の朝賀使の半数は上京が許されていました。その後、安史の乱を経て唐の国力が衰えてくると、上京の許可は1割ぐらいに減りました。

こうして大使以下の一行は、上京を許された人々を連れて都(長安)に向かいました。しかし、この時は事情が違っていました。この年、唐は日照りのために大飢饉が起きていました。そのため、時の皇帝玄宗は、翌年正月に大運河の終着点で、江南産の米の集散地でもあった洛陽に行幸、しばらくここを居処にしていました。それを知らされていなかった遣唐使一行は、長安まで行き、後戻りして洛陽へ。4月になってようやく玄宗と会見しました。

朝貢の品々と使節の仕事

大使の多治比広成らの一行は、4月になって、玄宗に朝貢の品々を献上しました。中国の史料(冊府元龜)にその品目が一部記されています。意義深いことです。

「四月、日本国、遣使来朝し、美濃絁(あしぎぬ)二百匹・水織絁二百疋を献ず」。

本来であれば、正月の朝賀に参列し、それにあわせて朝貢品を捧呈するのですが、上記の理由で大幅にずれ込んだわけですが、これで大使の役目はほぼ終わりましたが、使節の仕事はまだ終わりません。留学者の引き取り、これから留学する者の配属、朝貢に対する回賜品の受け取り、各方面の見学、唐人の招聘、買い物などなど。なかでも唐僧、インド僧や学者などの招聘の成功は、彼らの努力の賜物でした。

帰国と遭難

広成一行が帰国の途に就いたのは、その年の10月でした。4船は同時に蘇州から出発しましたが、憶良からはなむけに贈られた「好去好来」歌のように平穩にはいかなかったようです。

出航してまもなく暴風に遭って船団はバラバラになり、広成は越州まで吹き戻されました。幸いにも11月20日に、種子島にたどり着きました。前回の遣唐使で渡唐した吉備真備や僧玄昉らもこの船

で帰国しました。副使の中臣名代が指揮する船は、やはり漂流して東南アジア海域まで流されました。翌年3月、命からがら広州まで戻りましたが、帰国する船がありません。そこで名代は一計を案じます。皇帝玄宗が熱心な道教信者で、自らは開祖老子の子孫だと信じ、老子の注釈書の「老子道德経」まで著していました。そこで名代は、日本で道教を広めるために「天尊像（道教の神）と道德経を賜りたい」と願い出ました。そのかいあって、玄宗は、「日本国王、主明楽美御徳（すめらみこと：天皇のこと）」宛ての勅書を名代に与えて帰国させることにしました。こうして天平8年5月、薩摩から太宰府にたどりつきました。

なお、名代が日本で道教を広めたという言い伝えはありません。

もう1船は、115人が乗り組んでいましたが、暴風で崑崙国（インドシナ）に漂着。ここで現地人

に捕らわれたり、殺されたり、逃亡した後疫病で死んだりしました。かろうじて4名だけが生き残り、崑崙王の庇護を受け、唐に送還されました。玄宗も気に向け、渤海経由で帰国出来るよう働きかけてくれました。天平10年5月、やっと渤海に到着し、渤海王の使節が日本訪問するのを待ちました。幸い7月に日本への使節派遣が決まり、帰国の途に就きましたが不幸にも、日本海の荒波に遭遇して転覆。わずか4名しか生き残りませんでした。

残る1船は、蘇州を出発して間もなく沈没してしまいました。そのことは5年後に明らかになりました。

■注

八省（はっしょう）：古代律令制度における中央行政組織。
だいじょうかん 太政官下の八つの政務を分担する機構で、なかつかさ 中務省・式部省・治部省・民部省は左弁官局、兵部省・刑部省・大蔵省・宮内省は右弁官局に属し、しとうかん 四等官はかみ 卿・すけ 輔・じょう 丞・さかん 録。

《‘わんりい’掲示板①》

◆わんりいの講座

中国語で読む・漢詩の会

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう！！

▲まちだ中央公民館 10：00～11：30

5月27日（日）第3・第4学習室

6月24日（日）第3・第4学習室

▲講師：植田渥雄先生

（桜美林大学名誉教授、
現桜美林大学孔子学院講師）

▲会費：1500円（会場使用料・講師謝礼など）

▲定員：20名（原則として）

*録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み：☎090-1425-0472（寺西）

E-mail:ukiuki65@yahoo.co.jp（有為楠）



◆わんりいの催し

ボイストレーニングをして 日本の歌を美しく歌おう！

あなたも私も笑顔が美しくなる！身体力を抜いて、気持ちよく発声しよう！！

●5月15日（火）10：00～11：30

●6月12日（火）まちだ中央公民館・視聴覚室

★動きやすい服装でご参加ください

●講師：Emme（歌手）

●会費：1500円（会場使用料・講師謝礼など）

●定員：15名（原則として）

◆申込み：☎042-735-7187（鈴木）

E-mail:wanli@jcom.home.ne.jp（わんりい）



【‘わんりい’の原稿を募集しています】

‘わんりい’は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話、これらと思うイベント情報などを気軽にお寄せ下さい。又会の活動についてのご希望やご意見及び‘わんりい’に掲載の記事などについても、ご感想をお待ちしています。

日中文化交流市民サークル ‘わんりい’

初心者のための体験のお誘い

【鶴川水墨画教室】

●講師：満柏（日中水墨協会・会長）

●場所：鶴川市民センター（町田市大蔵町1981、駐車場有）

●曜日・時間：第2又は第4月曜日

14：00～16：00

●体験参加費：1000円

（見学無料/手ぶらで参加可）

●問合せ：野島☎042-735-6135



樹木・花にまつわる物語

第4回 ヒナゲシ 虞美人草

河本義宣

今回はケシ科ヒナゲシを取り上げました。学名 *Papaver rhoeas* L. (1753)。Lは学名を創設したリンネ (Carl von Linné) のLです。ヒナゲシはヨーロッパ原産で英語でシャレーポピー、フランス語でコクリコ、イタリアはパパベロなどと呼ばれ親しまれている花です。中国では虞美人草と呼ばれていますが、以下の故事に由来しています。



ヒナゲシ、町田市内にて (2018年4月)

中国は長かった群雄割拠の時代も秦の始皇帝の出現で統一国家になりましたが、不老不死を願った始皇帝もついに仙薬を得ることが出来ず他界します。仙薬と言われた薬の中毒で死んだともいわれています。始皇帝の死後、秦の厳しい法律に苦しめられた人たちが各地で反乱を起こします。陳勝・呉広で始まった反秦運動(造反)も秦の都(漢陽)のある漢中を目指します。その代表選手が漢の劉邦であり、楚の項羽でした。

当時、劉邦の軍勢10万に対し、項羽は40万でこれまでの武功も圧倒的に項羽が勝っていました。そんな力関係の中で、楚王義帝の「先に漢中を定めたものをそこの王とする」という約束事がありましたが、漢中への一番乗りを果たした劉邦は秦の子嬰の降伏を受け入れ、宮殿の庫は封印し、後宮三千の美女には手を付けず、項羽の到着を待ちます。劉邦は他意のないことを伝えるために項羽が陣した鴻門に出向きます。これが有名な「鴻門の会」です。

「鴻門の会」の詳しい出来事は別の機会に譲るとして、この会を機に二人は対立関係になります。いわゆる「楚漢戦争」の始まりです。最初は項羽が圧

倒的な優勢でしたが、劉邦には優秀は参謀や武將が付くようになり、一方の項羽軍は項羽の独断、専横に嫌気がさし、優秀な武將が一人去り、二人去って劉邦軍に加担するようになりました。形勢は逆転し、項羽は垓下まで追われました。

野営していると敵陣から項羽の祖国楚の歌が聞こえてきます。我が下にいる筈の楚人が敵陣に満ち満ちていることを知ります。劉邦が項羽に聞こえるように楚歌を歌わせたともいわれ

ています。四字熟語「四面楚歌」はこの故事に依っています。我が命運もこれまでと知った項羽は高らかに歌います。

力拔山兮 氣蓋世(力は山を抜き 氣は世を蓋う)

時不利兮 騅不逝(時利あらず 騅逝かず)

騅不逝兮 可奈何(騅逝かざるを 奈何すべき)

虞兮虞兮 奈若何(虞や虞や 汝を奈何せん)

戦場にあってもいつも同道していた愛妃虞美人はこれに和して舞い、また、返歌します。

漢兵已略地(漢兵すでに地を略し) 四方楚歌声

(四方楚の歌声す) 大王意氣尽(大王意氣を尽く)

賤妾何聊生(賤妾何ぞ生をやすんぜん)

と歌いました。虞美人が歌い終わると項羽は愛馬、騅に乗り、手勢八百余人とともに出撃し、それを見届けた虞美人はこの地で自害しました。紀元前202年のことです。後世、ここにきれいな花が咲きました。土地の人たちは往時の虞美人を偲んで、この美しい花を虞美人草と呼ぶようになりました。

■引用：(1)陳舜臣著、中国五千年(上)、講談社文庫 1989.

(2) Wikipedia

今日は晩唐の詩人杜牧の「清明」と、盛唐の詩人王昌齡の「芙蓉楼にて辛漸を送る」を学びました。

平明な杜牧の詩は、江戸時代以来日本でも愛誦され、「江南の春」「山行」は特に有名。詩吟でもよく歌われます。そんな杜牧の詩の中で、この「清明」という作品はとても有名かつ得体の知れない詩なのだそうです。

日本で最も愛誦された『唐詩選』はおろか、今も中国で愛誦されている『唐詩三百首』、更に5万首近くもの唐詩を網羅した『全唐詩』にも入っておらず、杜牧の詩文を集めた『樊川文集』にも収録されていません。唯一、宋代に編纂された『千家詩』にのみ杜牧の作として納められているのだそうです。これが広く読まれたお陰で今では多くの人が杜牧の作と信じて疑いません。しかし本当に杜牧が作った詩なのかどうか分からない、ちょっと謎めいた詩です。清明というのは二十四節気の一つで、日本でもよく知られています。中国では清明節と呼ばれ、お墓詣りをして先祖を偲ぶ日でもあります。

清明節は4月5日前後(今年の場合は4日)。この頃はピクニックやお花見に良い時期ですが、あいにく雨の多い時期でもあります。日本では菜種梅雨とも呼ばれますね。

この詩は、お墓詣り、或いは行楽に出たものの、突然の雨に降られて、道行く人は右往左往。こうなりゃ酒でもくらってやろう、と酒屋はどこか、と尋ねたら、牧童があっちの杏の花の咲いている所だよ、と答えたという内容です。これは有難い、でもかなり遠そうだな、と思ったのかどうか。軽くふざけて書いた様にみえて、ピシッと作詩の法則に合っていて、現代中国語でも読み易く、今日の発音練習も参加者一同の呼吸がピタリと合ってスムーズにいきました。

ところが内容も一見平易に感じられる一方で、よく味わってみると作者自身が雨に遇ってアタフタしたのか、そういう人達を目の当たりにして書

いたのか分からないし、また二行目の「路上の行人魂を断たんと欲す」という言葉は雨が降ったくらいで大袈裟ではないだろうか、と考えさせられます。「断魂」とは、深い悲しみや強い感動を表わす言葉だからです。そういえば日本では魂が消えると書いてタマゲルなどとも言いますね。あるいは同一の語源から来ているのかもしれませんが。本当はどうなんだろう、と考えせられて、何となく余韻がある、そんな作品です。

「詩というものは、どこかワケがわからんところがあるのが良いですねえ。散文みたいにあんまりハッキリ分かる詩は飽きられます。どうなんだろう?と答えのわからない事を一千年も人に考えさせる、これは詩の魔力ですね」と植田先生。

「詩の魔力!」植田先生の言葉にはいつも、ハッとさせられます。そうか、そうだなあ、芸術っていうのは鑑賞する人を異空間に連れていきながら、自由に空想させ思考させる一種の魔力なのだなあ、と改めて感じました。

それにしても、予定外の事が起きてムシャクシャした時に「こうなったら酒でもくらってやれ」と思うのは千年前も変わらぬ人の心理。妙に親しみを感じます。

杜牧は満50歳になる前に亡くなりましたが、文学者として非常に多くの作品を残しました。平明で分かりやすい表現、豪放な性格、女性にモテ、芸者遊びも楽しんだ多面性のある人だったようです。同時代の李商隠と共に小杜、小李と並び称されました。これは、一時代前の巨匠、杜甫と李白を老杜、老李と呼ぶのに対して付けられたニックネームです。

ちなみに杏花村、と言えば「酒どころ」というイメージが出来上がったのも、この詩からだそうです。中国全土に杏花村という地名があるそうですが、最も有名なのは汾酒(フェンジュウ)の故郷、山西省太原。しかし、この詩に読まれた杏の花咲く酒どころは、恐らく杜牧が左遷された江南の地だったよう

qīng míng
清明

dù mù
杜牧

qīng míng shí jié yǔ fēn fēn, 清明の時節雨紛紛
 lù shàng xíng rén yù duàn hún. 路上の行人魂を断たんと欲す
 jiè wèn jiǔ jiā hé chù yǒu, 借問す酒家は何処にか有ると
 mù tóng yáo zhǐ xìng huā cūn. 牧童遙かに指さす杏花の村

です。しかも、この時代はまだ汾酒のような度数の高い蒸留酒は作られていなかったようです。

山西省の杏花村はこの詩を掲げて町興しのシンボルにしているようですが、杜牧がこの詩を読んだ時代よりも後に出来た村とお酒のようです。

前置きが長くなりましたが、原詩は上です。

訳のわからん詩なので、訳のわからん訳が良いんじゃないかと、先生が付けられた訳はこちらです。これがまた、語呂が良く、暗唱したいような名訳です。

清明節に雨しとど
 道ゆく人は気もそぞろ
 酒屋はどこじゃと尋ねたら
 牧童の遙か指さす杏花村

さて、二首目は『唐詩選』に納められている王昌齡の詩です。王昌齡は盛唐期の詩人で、李白とも親交が深かった人です。科挙に合格し、一応エリートコースに乗ったものの、官僚の世界では評判が悪く、左遷させられます。

官僚を務めるには心が純粋過ぎたし、この人もま

fú róng lóu sòng xīn jiàn
芙蓉楼送辛渐

wáng chāng líng
王昌齡

hán yǔ lián jiāng yè rù wú, 寒雨江に連なりて夜呉に入る
 píng míng sòng kè chǔ shān gū. 平明客を送りて楚山孤なり
 luò yáng qīn yǒu rú xiāng wèn, 洛陽の親友如し相問わば
 yī piàn bīng xīn zài yù hú. 一片の氷心玉壺に在り

た遊び人だったようで、流した浮名は少なくなかったようです。「登鶴雀楼」の詩で有名な王之涣と共に、女性にモテモテの流行作詞家だったようです。さて、この詩は鎮江にあったと言われる芙蓉楼で、同じく左遷されていた仲間の辛漸が洛陽に帰るのを送ったときの送別の詩です。

「良い詩人ほど性格が変わっていて、ある意味純粋で扱い難い。だから左遷させられる

人が多いんですよ。左遷させられた方が全国の風土人情に触れて、良い作品が出来るんですよ。頭で考えた詩ではなくて、実体験の重みが加わっているからね。杜牧、白居易も左遷組。蘇東坡なんかは一生左遷だったね。」と植田先生。

この詩のハイライトは何と言っても最後の一句、一片の氷心玉壺に在り。

「もし、故郷の親友達が私のことを尋ねたらなら、氷のように澄み切った心が玉の壺に入っている、と答えてくれ」と言っているのです。世間では色々言われているが、私は変わることなく清い心でいるのだ、という意味だそうです。この一句は非常に有名で、中国の現代文学者である謝冰心のペンネームもここから来たようです。

この詩も、平仄と押韻何れもピッタリで、芸者遊びで鍛えた？ 音感の良い芸術家の才能がにじみ出ているような秀逸な作品です。

芙蓉楼で辛漸を見送る。

冷たい雨が揚子江に降り注ぎ、川の水と連なって、夜、呉の地方へと流れていく注。

早朝、北へ旅立つ友人を見送れば、楚の山々が取り残されたように寂しげだ。

洛陽の親友が、もしも私のことを訪ねたならば、氷のように清らかな心が、玉の壺に入っているようなものと答えて欲しい。

■注：多くの解説書では、「呉に入る」の主語は作者自身と解しているが、「寒雨」を主語とみなす解釈もある。これは雨を半ば擬人化した表現で、こちらの方が原意にかなっているように思われる。

海外出張の思い出 (旧ソ連・ノボロシースク編 ④)

高島 敬明

我々第1陣のチームのノボロシースクでの生活がスタートし、毎日、日本からの到着荷物の所在確認マップ作成に取り掛かっていました。そしていよいよ15日後には、第2陣・30名の塗装、配管の作業員を迎えて本格的な作業が始まっていきます。

そんなある日、日本から派遣されて我々の食事を作ってくださる「(株)魚国^{うおくに}」のクックのSさんが私の所に相談に来ました。我々より1か月早くエンジニアリング会社の社員と一緒に来ているとのことと料理の苦勞について話し始めました。苦勞話に入る前に、ご存知の方もいらっしゃると思いますが(株)魚国という会社について簡単に紹介しようと思います。

(株)魚国は、大阪市に本社を置く給食関連企業で、北海道から九州まで全国に拠点を置く日本における給食事業のパイオニアです。学校給食、社員食堂、病院食堂、一般のレストランなど幅広い事業展開をしています。創業は1914年と100年を超える歴史を誇り、従業員は2万人に達しようかという大企業であります。こうした企業ですから海外で事業を推進している企業などの要請があれば、一定の期間社員を派遣することもしているようです。

さてSさんの話はまず「米」の問題からでした。米を含めて食材はすべてソ連から支給されることになっています。コーカサス産の米ですが、粒は小さくあまり美味しくはないのですが、匂いもないし食べられないことはないと思っていました。ところが時々非常に硬い石を、歯が欠けるかと思うほど噛むことがありました。支給されるコメの中に小さな石がたくさん入っているとのこととです。ソ連ではコメはお粥状のスープにして食するので多少の石は問題ないそうです。彼はこれまで我々のために、食堂の片隅で毎日お盆状のものを斜めにして石の選別をしていたのです。

15日後には人数も増えるし、本業も忙しくなるのでどうしたらいいか焦ったの相談でした。私は、我々が仕事が終わってから皆でお手伝いします、と即決

で答えました。私は率先垂範、娯楽室で毎夜2、3日分のコメの選別を始めました。何もやることのないメンバーも一生懸命にやりました。今思えば滑稽のようですが、主食だけに皆真剣でした。

次の相談は厨房設備についてでした。食堂に付随する厨房は清潔でしたが、何もないただっ広いところでした。ソ連は電気が豊富なのか厨房での火力は直火は全くなく電力だけです。1.5×2.0mぐらいの鉄板で料理するのですが、熱くなるだけで真っ赤になることはありません。生肉をバザールで買ってきて焼いてみたら乾燥しパサパサになってしまい、日本人にはとても食べられないそうです。「直火が必要なステーキのようなものは、料理できないので食卓には出せないのです」と思い詰めたようにお話をされました。

生肉は要請しても届けられるには一週間かかるそうです。副食は直径20センチ、長さ30センチぐらいのソーセージですが、これも品薄で手に入りにくいそうです。食事には、ソ連の食パンが籠に盛られていて自由にいくらでも食べられます。日本の食パンより生地が荒く、紅茶の残り汁で焼いたと皆で噂していたのですが、茶色で苦みと酸っぱさがあり、ほとんどの日本人の口には合わなかったみたいです。ある時から食卓に上がらなくなりました。ともかく食事にはクックさんも随分苦勞されたと聞きました。このよう



5月1日、メーデー参加時の写真。屋台などもなく、閑散としている。この後に花を持った市民が行進する。(1978.5)



Sさんが作ったメーデーのご馳走を班長と。(1978.5)

な事情から鍋物やスープものが中心でした。スープ
と言えば、この辺りのウクライナ地方の伝統料理に
「ボルシチ」があります。ボルシチは世界三大スープ
に入れられることもあるようです。通常は中国の「フ
カヒレスープ」、フランスの「ブイヤベース」、タイの
「トムヤムクン」を言うそうですが、いずれにしてもこ
の四ヶ国のスープは絶品とされているのです。魚国
の料理は基本的には日本料理でしたので、私たちは休みの日に本場
のボルシチを食べに街に繰り出しました。あるレストランに入ってボル
シチを注文すると、直径7～8
センチ、高さ10～12センチのお
寿司屋さんにあるような大きめの
コップに入って出てきました。中の
具材は分かりませんでした。早
速口をつけてみたところスープの
熱いこと。口内の表面の皮がペロ
っと取れてしまいました。コップの
表面は熱いラードに覆われていた
のです。でも、とても美味しかった
のを今でも覚えています。

アルコールについて触れますと、ビール以外はほぼ
自由に入手できました。ウオッカも我々の食堂では瓶
で買うことができますが、外部では量り売りで100g、
200gと細かく分けられています。アルコールは、ブ
ランデーが好まれ次にウオッカ、ウイスキー、ワイン
の順になります。シャンパンはこの地方産がヨーロッ
パ1になったと自慢していました。ビールはほとんど

見かけませんでした。当時ウクライナにペプシコーラ
の工場ができ、飲んでみましたら非常に甘く、何でこ
んなに甘いのかと思いましたが、ウオッカを舌の上で
丸めて一気に飲み、次に甘いコーラを飲むのがハイカ
ラな飲み方とされていました。ちょっと変ですね！

Sコックさんには、食事だけでなく何かと本当にお世話
になりました。ある日そのSさんに連れられて、日曜日、バザール(自由市場)に出かけました。現地の人達は日曜日には家族でそこに買い物に行くのが楽しみだそうです。バザールは別名「泥棒市場」と呼ばれるだけあってどこから仕入れたのか何でもありません。我々の日本から持参した工具が盗まれたことがありましたが、翌日にはそこで売っていました。ジャガイモ、ニンジン、トマト、イチゴ、少しの肉類、お花、中古の工具類、古い靴、などバラエティーに富んでいます。すり減った靴の片方だけというのもありました。一日中その前に座って売れるのを待つだけです。不思議なのは寒くなってもバラの花

が売られていました。何かあればバラの花束を持ってお祝いに行かれるようです。清潔な晴れ着を着飾った人々が行き交います。服装の原色がまばゆいほどです。黒海周辺は白人と黄色人種の入り混じった地域で、びっくりするような美人にお目にかかることがあります。映画館もありましたが、さすがに中には入りませんでした。今と比べれば、当時の人々の楽しみは限られていたということですね。Sさんから食事以外でもう一つ相談がありました。それは、「シャワー用の温水を何トン使うのか



シャワー室です。床はヌルヌルと気持ち悪い。

?]ということでした。もうすぐ250人態勢になるのですが、風呂好きの日本人にとっては大きな問題です。一人一日20リッターとして250人で約5トンということで早速マネージャーに報告し、文章で海運省に申し入れをしました。

以上のような環境下で、皆不自由しながらも頑張ったわけです。

(続く)

延川県で、最も有名な民間芸術は、剪紙と布堆画(アップリケ)です。布堆画にも延川県独自の雰囲気があります。布堆画とは、剪紙と同様の窓飾りなどの装飾品を布で作ったもので、元々は陝北の女性達の日常の針仕事から生まれたものです。昔の農村には、「新しい服は3年着て、古着として又3年、破けたら繕って又3年着る」と言う言葉があります。

子供は遊んで、男性は野良仕事で、衣服の肩や膝の部分がすぐすり切れますが、陝北の女性達はこの繕い仕事に素朴な美意識を発揮しました。継ぎ当てをするにも、補強をするにも、形を切り出して、細かい針目で縫い付け、いろいろ工夫をして、日ごとに新しい模様を考えながら、針を動かすのです。

小さな子供の靴のつま先に穴が開くと、手先の器用な母親は、虎の頭を布で切り抜き、靴の先に縫い付けて、「虎靴」を作り上げます。

枕に穴が開けば、適当な布を探し出して、草花や動物などの形を縫い付け、アップリケ付きの枕を作り上げます。布団が古くなると、別布で丸い模様や「双喜」字の模様を作って縫い付けました。

それがだんだんに、新しい衣服、特に子供服には、

花や鳥の模様、虎や獅子の模様を縫い付けて、

可愛くて恰好良い服を作るようになりました。

布堆画制作の材料は、主に農家の婦人たちの手織りの布で、色も赤・黄・青・黒・白など様々です。端切れや裁ち屑を使うこともあり、色や形がまちまちで、出来上がりも一様ではありません。

一般的な制作の過程は、先ずどのような模様にするのか構想を練り、絵を描いてサンプルを切り出して見ます。それから、模様に従って配色を考え、布地の上に並べたり、つなぎ合わせたり、はめ込んだり、積み重ねたりして、縫い合わせ、細部を整えて作品に仕上げます。小さなものは一人でもできますが、大きな図案になると何人かで協力して作り上げます。

布堆画の題材は、民話・伝説、伝統劇の主人公、民族の風習、動物・花鳥風月などなど広範囲からいろいろ選ばれています。嫁入りに持ってゆくものなら伝統的なお目出度い図案の「蓮花に戯れる魚(夫婦の愛情を醸す)」、「蓮花に子供(賢い子供が授かる)」、「蛇と兎の図(長寿で富を成す)」などが使われます。

陝北の、手先が器用な女性たちは、端切れを利用して、子供の為に虎の帽子、虎の枕カバー、獅子の靴、腹掛けを作ったり、色の綺麗な布を選び、お目出度い図案で新郎新婦の枕カバーなどを作ったりします。

おめでたい図案といえば、先にも書きましたが、「蓮花に戯れる魚」、「麒麟が子を授ける(賢い子が授かる)」、「蓮年貴子(毎年子を成す)」、「石榴の実(多産の願い)」、「太った子供(子を授かる願い)」などで、結婚の喜びを表し、夫婦の睦みあいや恵み豊かな生活を祈るのです。

その他、「孫悟空」、「虎」、「犬」などの模様で布堆画を作成して人に贈って喜んでもらったりしま



高鳳蓮の布堆画は、大きくて有名だ



最初に作られた門神布堆画。高鳳蓮と筆者(1996)

す。このようにして、布堆画は、徐々に、壁掛けとして鑑賞の対象となる芸術性のあるものに育っていきました。

高鳳蓮の布堆画は剪紙の図柄に基づいていますが、剪紙と布堆画は材料が違うので、剪紙と比べると、更に簡略化された分、躍動感が増し、陝北で出土する漢代墳墓の石刻像を見るようで、生气に溢れています。色遣いは一般的な刺繍と同じですが、刺繍に比べると模様が布面で刺繍より広いのでより鮮明で強烈な印象を与えますし、図案がよりシンプルで、豪快・素朴で独特の雰囲気があります。

陝北布堆画の独特な雰囲気は、もともとこの地方で伝統的に受け継がれて来たものようです。高鳳蓮につながる布堆画の流れは次のようなものです。

第一代は、清代末に、延川県賀家湾園則河村から嫁いで来た人で、“とても器用な婦人”として

知れ渡っていましたが、本名は分かりません。当時の常として文字は読めませんでした。この女性は生涯を通して剪紙と布堆画を作り続けましたが、特に布堆画が好きだったようです。彼女の作品として、“^{ダーリエン}裕襪”と言って、今でいうポシェットのような袋に一对の鳳凰をあしらったものが残っています。

第二代は、延川県上湾村から嫁いで来た女性で、名前は楊四姐と言ひ、布堆画が上手でしたが、作品は残っていません。

第三代が、楊四姐の娘の高鳳蓮です。高鳳蓮の嫁ぎ先は同じ延川県文安駅鎮白家塬^{バイジャーユアン}(台地)村です。

高鳳蓮は、布堆画と剪紙を同時期に始めましたが、布堆画の製作は工程が煩雑で、時間が掛かるので制作数が少ない上、作ればすぐ売れてしまうなどの理由で残っている数が非常に少なく、資料の収集はかなり困難です。

剪紙は、一般的に6～8枚の紙を重ねて剪るので、同じものが6～8枚できますが、布堆画は1枚しかできません。取材に行っても、完成した布堆画が、前日に売ってしまったということもありました。作者自身に、自分の作品を撮影して保存するという習慣がありませんから、布堆画は記録に残りにくいのです。

高鳳蓮の布堆画は、剪紙の伝統的な図柄を踏まえて制作されているように見受けられます。様々な

色の布を張り合わせたり重ねたりしつつ針仕事の技法を駆使して、竜王・門神・財神などに加えて民間伝説、風土と人情、現実生活も織り交ぜて、華やかに様々な物語を展開させています。

掲載の門神図は、剪紙の図案をそのままに、門神が左手で竜の首を捉え、右手に竜の身体を乗せ、花の冠の上に竜の尾を垂らして、門神の威力を誇示しています。金色の魚型の



布堆画門神



剪紙門神



布堆画財神



剪纸財神

眼を見開き、髭を蓄えて、見る人に恐れを抱かせます。強烈な原色を組み合わせ、色を重ねて重厚な立体感を出しています。間が抜けたような雰囲気がありながらも、威風堂々と、白馬に跨った姿が印象的な作品です。

財神は、頭に金銀財宝の冠を頂き、両手で金塊を捧げています。大きな両耳は肩まで届くほどに垂れ下がり、この上なくお目出度い福相をしています。身体には、一対のカササギ(中国ではお目出度い鳥とされる)を帯びて、お目出度い雰囲気をもりあげています。

高鳳蓮は、このような作品の他に、布堆画を施した布を使ったバッグ・ショルダーバッグ・札入れ・状差しなど、実用性と審美性を備えた作品も作り、人気商品となっています。

話しは布堆画に関わらない余談になりますが、1997年の春節、外国人に開放さればかりの延川県は、初めて外国からの観光客の一行を迎えました。日本の版画家・田井光枝さんをリーダーとする一行8名と、中央美術学院民俗学部の日本人留学生を加えた9名が広大な黄土高原の文安駅郷の山上に到着しました。広大ではあっても痩せて乾いた黄土の大地に住む人々が心から温かく自分たちを迎え

てくれる様子に日本の客人たちは、次々に感じたことを述べました。

「黄土高原って人類のふるさとって感じね」

「人々は素朴で、質朴な生活を送る黄土高原。長い間、変化を知らないできたこの土地がとても気に入ったわ」

一行のひとり、抗日戦争期、中国で生まれ育った女性が図らずも言いました。

「とても気持ちの良い人たちばかりだし、景色も雄大で素晴らしい。心の中で焦がれていた故郷に戻って来みたいだわ」

当時は未だ外に向けて開かれていなかった陝北黄土高原の小さな山村に、一度に多数の日本人がやって来たことは、村人にとっても大いに見聞を広げる機会でした。映画やテレビで見る日本人は凶悪で憎むべきものですが、ここに現れた人々は、話す言葉は違いますが、顔つき、皮膚の色、服装など殆ど彼らと同じで、而も礼儀正しいのです。高鳳蓮のヤオトンにこんなに多くの日本人が訪れたことで高鳳蓮の面目も立ったことでした。

高鳳蓮の剪纸作品を見て、日本人一行はびっくりしたようでした。高鳳蓮の作品は、94年に北京で紹介され、世界婦人代表大会期間中に展示され、作品は、外国の人々および都市の専門家・学者たちの好評を博しました。私は先に「陝北四女性の剪纸」を編纂し、彼女の剪纸を系統的に掲載しましたが、その後5・6年を経て、高鳳蓮の作品は大きな変化を遂げていました。

作品のサイズが大きくなり、作品の勢いが増すにつれ、作品は益々個性的になってきました。昔風の手のひらサイズの窗花(そうか)は見られなくな

り、代わりに四半切・半切・全紙、更には何枚かの赤い全紙を貼り合わせて作成した大作が多くなりました。内容もまた、単一の動物・草花・人物・十二支などから、パノラマ式画面・叙事詩などの大型作品に変わって行きました。

高鳳蓮は、人類の先祖・聖人、帝王君主、村人たちの変化に富んだ生活、楽しく忙しい仕事、幸せを願い喜びを迎える気持ちなど全てを、自己の画面の中に取り入れようとしているようです。

千里の道を遥々やって来た日本人たちは、中国民俗文化についてある程度の知識を持っていましたが、高鳳蓮の、これまで見慣れたものと異なる目新しい作品に驚きを隠せなかったのです。丁度、私が初めて高鳳蓮の作品を目にした時と同じでした。

中国民間芸術に興味を持った田井光枝さんと岩田温子さんは、その後、別々に現地を訪れ、高鳳蓮の作品の他、安塞県の侯雪昭、洛川県の韓菊香らの剪紙作品多数枚を購入し、翌年1997年5月、'わんりい'(当時は、まだ「つるかわ中国文化研究サークル」と称していた)の協力を得て、二人で町田市立国際版画美術館で、「果てしなく広がる黄色い大地の華・黄土高原の剪紙展」を開催しました。

2003年5月のある日、延川での2年間の職責を終了する前に、私は高鳳蓮が住む白家塬と、高鳳蓮に別れの挨拶をするために訪れ、彼女と手を取り合って、長年お互いが気に掛けていたことを話し合い



腹掛・蓮に戯れる魚

ました。それは、彼女が私の住む都市で展覧会を開きたいと望んでいることです。私は手段を考えて、出来るだけ早く実現するように尽力すると約束しました。

高鳳蓮の作品は、国内外の多くの芸術機構が収蔵しています。中国美術館は、彼女の布堆画「財神」、「黄帝」、「関

羽」、「土地の神」などの作品を所蔵しています。彼女の作品は又、フランス・ドイツ・アメリカ・台湾などの国や地域の多くの収集家によって所蔵されています。

「人民日報」、中央テレビ局、「東方時空」など10社以上のメディアが、彼女に関する特別報道をしています。2001年6月26日、中央テレビ局は「幸せな老後」という番組で彼女の特集を放送しました。2004年6月には、中央テレビ「博物館めぐり」で取り上げられました。

国家の“特別功労賞”などの取得は十数回におよび、2004年4月には、ユネスコが主導した“母なる大河を巡る”「中国無形文化遺産伝承者リスト」に選ばれて登録されました。

著名な剪紙研究家・勅之林氏は、高鳳蓮を評して言います。「私は、高鳳蓮が中国一の剪紙作家だとは言いません。しかし、彼女の作品のような剪紙作品は他にありません。彼女の剪紙作品のようなものは、世界中どこにもないといえます」。中国美術館の楊力舟館長は言います。「世界にピカソあり、中国に高鳳蓮あり」と。

はてしなく広がる黄色い大地の華
黄土高原の剪紙展
 まりびみ
 中国陕西省に見る
 生命と豊穡への
 祈りの形

4/29(祝) ~ 5/3(日)
 10:00 ~ 17:00(無料)
 町田市立国際版画美術館・市民展示室
 つるかわ中国文化研究サークル 後援
 問合せ: 岩田 ☎/FAX 0427-36-6642
 田井 ☎ 0427-34-5100

講演会
 中国の切り紙(剪紙)
 4/19(日) 13:30 ~ 15:30
 麻生文化センター・視聴覚室
 (小田急線新百合ヶ丘下車2分)
 1000円(講師代と会場費)
 つるかわ中国文化研究サークル
 問合せ: 岩田 ☎/FAX 042-36-6642

町田市における剪紙展チラシ(1997年)

ジュワジーワーワー
[記念展に寄せて] 陝北の守護神・抓髻娃娃ってどこから来たの？

韓菊香さんと侯雪昭さん

田井光枝

‘わんりい’の活動開始翌年の1993年、丁度日本に版画の研修で来日し、町田で滞在中のまだ、30代半ばの周路¹⁾さんと知り合った。周さんが我が家に遊びに来るようになり、‘わんりい’²⁾のメンバー達との交流が始まった。メンバーたちは周さんが沢山の版画作品を携えて来日していることを知り、自分たちも見たいと、早速、周路個展を開催する話がまとまった。小田急線町田駅近くにできたばかりの全労済・ぶらぼう館が小さな展示スペースを開放していることを知って、交渉し、周路個展を実現させた。

下方に掲載の画像は、ぶらぼう館がニュースとして用意した当時のハガキだが、ハガキに掲載された画像を見て欲しい。展示作品は50×40cmサイズ程の20何枚だったと思うが、いかにもシルクスクリーンらしい鮮やかな彩りで、大半は私たちが見たことがない、髪の毛を結んだ子ども(?)がモチーフの作品が並んだ。‘わんりい’のHPのトップページにも、両手に大きな鳥を掲げた周路さん作品の、真っ赤な子供が貼り付けられて‘わんりい’のシンボルになっている。

作品中の子どもは恐いようでもあり可愛らしくもあって、私たちの表情にどう受け止めてよいかみたいな迷いが浮かんでいるのを受け止めたようで、周路さんが、「この子たちはね、ジュワジーワーワーといって、すごい力を持っているんだ」と説明した。

ジュワジーワーワーは漢字で表記すれば「抓髻娃娃」で、中国語を少しでも齧れば、「娃娃」は子どもを指すので髻を付けた子どもくらいの意味だと知ると思う。初めて陝北を訪れた時、沢山

の剪紙作品のテーマが正にこの抓髻娃娃だった。千差万別、さまざまな抓髻娃娃が剪られていた。

髻といっても普通にイメージする髻をつけているとは限らない。髻が鶏であったり大きな蓮の花であったりはよいが、体中に魚をはり付けていたり、蓮花の上にどかんと腰を据えたり、虎にまたがって仏具ともいえないようなものを振り上げていたりしている。周路さんが言うように、抓髻娃娃は陝北地方の、すべての人々をすべての厄から守る護神なのだ。

陝北を紹介した周路さんの著書を私のつたない訳で‘わんりい’に掲載したことがあるが、医者が手近^{いのち}にいない黄土高原で、命の最後の頼りとして、急ぎ抓髻娃娃を剪り、それを燃やした灰にお湯を注いで飲ませるといふ情景があった。21世紀初頭、中国を震撼させたサースの折も陝北の農家では抓髻娃娃を入り口に貼ったそう。

抓髻娃娃は女の子がよく剪られている。次ページに掲載の侯雪昭さんの作品のように女性自身が仄めかされていたり、中には男の子もいて、さりげなく腹の下に男性のシンボルが下がっていたりという作品もある。貧しく常に生命の存続を脅かされてきた陝北での子子孫孫に命を繋げてゆく切実な祈りの声を聞くようだ。また、発音の語呂合わせによる目出度い図柄、鶏jī=吉jí 魚yú=余yú 蝠fú=福fúなどを体中とく構わず貼り付けた抓髻娃娃や、蓮花は女性、魚は男性で、掲載の韓菊香さんの作品(右)のような抓髻娃娃も見られる。

この抓髻娃娃は一体いつ黄土高原で生まれてそれほどまでの力を持つものになったのだろう。20年前、一緒に陝北の剪紙展を開催した会メンバーの岩田温子さんと抓髻娃娃の不思議な存在を語り合った。今回またしても同じ思いに駆られている。しかしこの春、陝北を訪れ何人かの剪紙作家の女性たちに会って作品を見せて貰ったが、若手作家の作品には抓髻娃娃はなかった。陝北での生活が変わりつつある今、抓髻娃娃は既にその役割を終えたのであろうか。



‘わんりい’ HPのシンボル

陝北の剪紙といえば高鳳蓮さんで代表されると思われがちだが、5月開催の「果てしなく広がる黄色い大地の華 陝北剪紙」展では、高鳳蓮さんばかりでなく、同時代に活躍した陝西省洛川県の韓菊香さんや、もう少し世代が下の安塞県の侯雪昭さんの作品が沢山展示される。

韓菊香さんは高鳳蓮さんより10歳近く高齢の、大柄な方で接していると人間的な温かさが自然に伝わって来るようだった。高鳳蓮さんは異能の人らしく誰も真似できない意表を突く作品が多く、魅力的だが、韓菊香さんの作品は高鳳蓮さんとは全く反対に、昔ながらの剪紙のテーマを豪快闊達な作風で堂々と剪っていた。秧歌(豊年踊り)や日常生活などいろいろなテーマでの剪紙作品も多いが中でも抓髻娃娃や虎が好きなようだ。来場くださった方はきっとユーモラスな虎の姿に笑いがこみ上げてくるに違いない。又、堂々とした力強い抓髻娃娃に惹きつけられると思う。韓菊香さんの大らかな抓髻娃娃には良いことを招き寄せしてくれそうな何かがあるのだ。誰が見ても分かりやすく、母親の温かな愛情を感じさせる作品は、剪紙コンクールでも高く評価され、高鳳蓮さんに次ぐ2等賞を得ている。

そしてもう一人、安塞県の侯雪昭さんの作品も説明しがたい魅力がある。1954年生まれとのこと



侯雪昭さん(右から3番目) 家族と一緒に。侯雪昭個人美術館にて(2018年2月)

で、私たちが初めてお会いした1997年はまだ40代だった。子どもの頃から絵が上手で器用な女の子として知られていたそう。料理上手で美味しい陝北料理でお昼をご馳走になり、剪紙を剪る様子など披露くださった。

侯雪昭さんは韓菊香さんや高

鳳蓮さんと世代が異なる若い新進の剪紙作家として、新しいものを作り出そうと現在も意欲的に取り組んでいる。大きな団花(円形の剪紙)作品や生命崇拜・子孫繁栄の隠喩を折り込んだ作品は侯雪昭さん独特の味わいがあり、作品の美しさも他の追従を許さない。2010年には陝西省非物質文化遺産剪紙技能一等賞を受けられたとのことだ。

韓菊香さん、そして高鳳蓮さんはすでに故人なられたが、今年春の陝北で、侯雪昭さん家族にお会いでき昔を語り合えたのは何よりの旅の収穫だった。

■注

- 1) 周路: 版画家、写真家。安徽省財形大学元教授。当時は、安徽省群衆美術大学学芸員だった。
- 2) わんりい: 当時は「つるかわ中国文化研究サークル」と称していた。

「果てしなく続く黄色い大地の華 陝北剪紙(切り紙)」展期間中の催しはどなたでも参加できます。5月14日のオープニングパーティでは、中国笙と二胡による中国民族音楽演奏の他、中国の楽しい小物を賞品にしたビンゴを楽しめます。どうぞお誘い合わせてお出かけください。(詳細: 24P)



↑ 2点とも韓菊香さんの抓髻娃娃作品



↑ 陝北女性による抓髻娃娃作品



↑ 4点とも侯雪昭さんの抓髻娃娃作品

麻生市民館利用団体による **あさおサークル祭2018**

● 2018年6月2日(土)・3日(日) ● 場所：川崎市麻生市民館全館(小田急線新百合ヶ丘北口3分)

■ 'わんりい'参加のプログラム(ご自由参加ください)

参加無料

● 6月3日(日)視聴覚室 10:30～12:00

講演『論語』から学ぶ言葉の力 そのⅡ

講師：植田渥雄(桜美林大学名誉教授)

孔子はうわべだけの美辞麗句を嫌い、実のある行動を重んじた人です。しかし、誰よりもコトバを重んじ、コトバの力を信じました。

昨年、好評を頂いた『『論語』から学ぶ言葉の力』に続く第2回目の講演です。'わんりい'漢詩の会・講師として、ユーモアある楽しいお話で講座参加者を魅了の植田先生のお話をお楽しみください。

■ 植田渥雄先生略歴

1937年、岡山市生まれ。東京大学文学部卒業
元桜美林大学教授、元NHKラジオ中国語講座担当講師、現桜美林大学孔子学院講師、現桜美林大学名誉教授

● 問合せ：☎ 090-4422-1374 (わんりい)

E-mail:ukiuki65jpp@yahoo.co.jp

● 7月23日(日)視聴覚室 13:30～15:00

《ボイス・トレ体験講座》 参加無料

ボイス・トレをして日本の歌を美しく歌おう!

講師：EMME(歌手)

身体の緊張を解いて、思いっきり声を出してみよう! トレーニングの後は気持ちよく「夏の思い出」を一緒に歌おう! きっと心が清々しく晴やかになりますよ。外国の皆さんも大歓迎です。

※動きやすい服装でご参加ください



2016 あさおサークル祭での体験風景

● 問合せ：☎ 090-4422-1374 (わんりい)

湖北省京劇日本公演 **項羽と劉邦～霸王別姫(全2幕)**

虞や虞や汝を如何せん

～立ち回りの最高峰 湖北省京劇院が日本公演限りの豪華キャストで臨む傑作～
チケットピア・チケット情報 <https://t.pia.jp/pia/event/event.do?eventBundleCd=b1894441>

● 2018年6月9日(日)～17日(日)

● 東京芸術劇場プレイハウス(JR・東京メトロ・東上線・西武池袋線「池袋駅西口2分」)

● チケット 一般：8,800円(全席指定 消費税込)

◆ 問合せ：03-281-8066 京劇公演事務局(楽戲舎内)



【中国文化センターの催し】 **中国戯曲 シリーズ講座** (講演言語日本語)

～京劇以外にも360を超える数多くの地方伝統演劇の劇種があり
1万以上の演目があるといわれている中国戯曲をもっと知ろう!～

参加無料

● 第4回 中国京劇団招聘活動の30年を振り返る... ◆ 講師：津田忠彦

5月16日(水) 15:00～16:30

京劇団を日本に初めて迎えた時の秘話など、多彩なエピソードを語る

● 第5回 中国五大劇種の一つ「黄梅劇」の魅力..... ◆ 講師：王文強

6月7日(水) 15:00～16:30

黄梅劇の歴史や魅力を実演を交えて伝える

● 第6回 世界無形文化遺産中国昆劇を知る..... ◆ 講師：陸海栄

5月16日(水) 15:00～16:30

昆劇の魅力を、現役の昆劇俳優が語る

◆ 申込みは中国文化センターHP「イベント案内ページ」 <https://www.ccctok.com/event>



第28回 インターナショナル・オルガン・フェスティバル・イン・ジャパン

オーストリア・ウィーンシュテファン大聖堂 主任オルガニスト エアンスト・ヴァリー 来日公演!

<http://www.saegusa-s.co.jp/con180620-22.htm>

● 6月20日(水)東京カテドラル関口教会聖マリア大聖堂
19:00開演(18:30開場) 5000円
全席自由

● 6月22日神奈川県民ホール(小ホール)
18:30開演(18:00開場) 3000円
* 'わんりい' 会員の参加費は
20%引きになります。

◆ 問合せ: ☎044-981-6171 (山田賀世)



● ERNST WALLY (エアンスト・ヴァリー)
1976年ウィーン生まれ。ウィーン音楽大学卒業後、教会音楽や音楽教育を研究し、世界中で知られている教会・シュテファン大聖堂典礼オルガニストとして任命される。ウィーン放送交響楽団、ヴィエナ・シンフォニーオーケストラ、ウィーン・トーンクンストラ管弦楽団などコンサートオルガニストとして活発に国際的演奏活動を行う。

★「陝北黄土高原の旅」に関心をお持ちの方へ 黄河にかかる中秋の名月を見に行こう!

変わりつつある陝北黄土高原を訪ねて、現地のすごさを実感してみませんか。果てしなくという表現しか思い浮かばない黄土の広がりの中を大蛇のようになりに流れる悠久の黄河の流れにきっと感じる何かがあると思います。今年の中秋は9月24日とのことで、中秋に合わせた黄土高原滞在予定を組んで頂きました。又、9月はこの地方が一番美しいとのこと。

旅のコーディネーターは 'わんりい' の何人かの皆さんがよくご存じで、'わんりい' の新年会にも参加されたことのある、山西省国際旅行社・黄玉雄さんにお願ひしました。

尚、この旅行は希望者によるツアーです。

■ 問合せは: 田井 ☎042-734-5100

E-mail:wanli@jcom.home.ne.jp

● 陝北旅行内容と見積もり(10名参加として)

| | | | |
|-------------|----------|-------------------------------------|--------|
| 22日 | 東京→西安 | | 西安泊 |
| 23日 | 西安→延安 | 移動の途中で黄帝廟見学 革命遺跡見学 | 延安泊 |
| 24日 (中秋) | 延安→小程村 | 黄河博物館見学 黄河にかかる月を鑑賞 | 小程村泊 |
| 25日 | 小程村滞在 | 乾坤湾 清水閣見学 ポート又は遊覧船に乗って黄河遊覧 | 小程村泊 |
| 26日 | 小程村→延川 | 高鳳蓮芸術館見学 文安驛古鎮 ^{注)} の見学 | 文安驛古鎮泊 |
| 27日 | 文安驛古鎮→西安 | 時間があれば始皇帝陵・兵馬俑・華清池など見学 或いは自由行動 | 西安泊 |
| 28日 | 西安→東京 | | |

注): 明清時代には規模が比較的大きな宿場町で、貨物の集散地として賑わっていた。高鳳蓮芸術館がある近くで宿泊設備もある。

※現地費用は、ガイド料、車代、宿泊費(ツイン部屋を一人で利用)を合計して約8万円です。但し、観光地入場料は年齢による割引がありますので、費用に入っておりません。滞在費用とは別に600円ほどのご用意をお願いします。

尚、東京と西安の往復チケットはチケットは参加者が相談をして決め、各自が購入下さいください。東方航空を使った場合の往復は6~7万円位ではないかと思ひます。

ライオンズクラブ国際協会設立100周年

西洋のヴァイオリンと東洋の二胡 驚異のコラボ

収益金は全てアイバンク協会に寄付します

<https://www.asahi-hall.jp/hamarikyuu/event/20180614.pdf>

渡邊麻衣(ヴァイオリン) 王晶(二胡)

友情出演 崔宗宝

- 2018年6月14日(木) 13:30開演(開場:13:00)
- 浜離宮朝日ホール(中央区築地5-3-2大江戸線築地市場駅徒歩4分)
- 前売り券3500円 当日券4000円(共に全席指定)

◆ 申込み&問合せ: 崔宗宝音楽事務所

☎/Fax: 03-6875-5039

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。各位からいつもたくさんの切手をお届け頂いて感謝申し上げます。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついで折に田井にお渡し下さい。

'わんりい'に連載の「フィリピン滞在記」(為我井輝忠著)が「フィリピンふれあい紀行」として本になりました

2014年11月から16年10月までの2年間、日本語教師としてフィリピンに滞在した。

当初、フィリピンについての知識が不十分で、戸惑いや分からないことだらけであった。なんとかそれらを乗り越えて、日本語を教えることや日々の生活を楽しめるようになった。そうした日々の思いや出来事を「フィリピン滞在記」として 'わんりい' 誌に掲載した。2年間の連載をひとつにまとめ、今回文芸社から『フィリピンふれあい紀行』として出版することができた。ご興味のある方は小生までご連絡ください。



▲ 問合せ: ☎042-735-9583 (為我井輝忠)
E-mail: weiwojing@yahoo.co.jp

‘わんりい’ 25周年/倉石賞受賞記念

果てしなく広がる黄色い大地の華 **陕北剪纸** (切り紙)

参加無料

会場：中国文化センター <https://www.cctok.com/> 東京都港区虎ノ門3丁目5-1 ☎03-6402-8168

2018年5月14日(月)～18日(金) 10:30～17:30(初日15:00 最終日13:00迄)

- 5月14日 15:00 中国民族音楽演奏 曹雪晶(二胡)/銭騰浩(中国笙)
15:30 オープニングパーティ 16:00 交流会、お楽しみビンゴ
*ビンゴでは楽しい中国小物いろいろ取り揃えました
どなたでも参加できますのでお問い合わせしてお出かけください
- 5月15日 14:00 講演会「中国の剪纸」
講師：三山 陵(首都大学東京非常勤講師 日中藝術研究会事務局長)
*菜に使いたい可愛らしい陕北の剪纸プレゼント
15:00 陕北黄土高原の暮らしと人々(スライド上映)
- 5月17日 15:00 映画「黄色い大地」(1985年/94分、中国語字幕) 監督：陳凱歌 撮影：張藝謀

映画「黄色い大地」紹介：1985年にロカルノ国際映画祭で銀豹賞を受賞した。陕北黄土高原をドラマの舞台に選んだ陳凱歌監督のデビュー作。張藝謀撮影の、美しく美しい陕北の風景と、人々が心情を託して歌う陕北の民謡「信天游」が心を打つ。

展示剪纸紹介：時に黄砂が吹き荒れ、至る所深く割れる丸裸の大地・陕北黄土高原。人々は実り少ない耕作をし、家族の無病息災と平安を祈って剪纸を剪り、ヤオトンと呼ばれる横穴式住居の窓に貼った。極貧の風土の女性たちの剪纸作品が1980年代、北京美術学院教授・靳之林等によって発見され認められるや、窓に貼られた剪纸は大きく羽ばたいて窓から飛び出していった…。異能の剪纸作家・高鳳蓮初期の作品他、20世紀末の陕北女性たちの心意気が溢れる剪纸作品大小500点余りを展示する。

主催：日中文化交流市民サークル ‘わんりい’ /中国文化センター 後援：中国大使館・文化部/(公財)日中友好会館/(公社)日中友好協会

▲会期中のイベント参加は、☎/Fax 042-734-5100(田井)へお申し込みくださるか中国文化センターのイベントサイト <https://www.cctok.com/event/> からお申込み下さい。アドレスをクリックすると催し物の一覧が出ます。参加したいイベント名をクリックすると申込フォームが出ます。

‘わんりい’ は、新入会をいつでも歓迎しています。年度途中に入会の方には会費の割引があります。気楽にお問い合わせください。

年会費：1500円 入会金なし

‘わんりい’ 振替口座(郵便局) 00180-5-134011

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。

①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。

②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：044-986-4195(寺西)

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。

◆町田市民フォーラム4F・町田国際交流センター、町田生涯学習センター6F、中国文化センター、川崎市国際交流センター、神奈川県立地球市民かながわプラザ。他でご自由にとって頂けます。上記へお問い合わせください。

‘わんりい’ 233号の主な目次

| |
|---|
| 「寺子屋・四字成語」(12)大公無私……………2 |
| 論語断片(36)「至らざる所無し」……………3 |
| 天府の国・四川省(3) 岷江と楽山大仏……………4 |
| 混迷の時代を拓くザメンホフの人類主義(23)…6 |
| 東西文明の比較(24)唐は「長安・洛陽への旅」……8 |
| 樹木・花にまつわる物語④ヒナゲシ 虞美人草…11 |
| 「漢詩の会」② 杜牧の「清明」と王昌齡の 「芙蓉楼にて辛漸を送る」……………12 |
| 海外出張の思い出・日ソ連④……………14 |
| 黄土高原に咲く目にも彩なる花々Ⅸ……………16 |
| 【陕北の守護神】‘わんりい’記念展に寄せて……20 |
| ‘わんりい’掲示板(1)……………10 |
| ‘わんりい’掲示板(2)……………22・23・24 |

【5月定例会開催日及び6月号‘わんりい’発送予定】 ◆ 問合せ：☎044-986-4195(わんりい)

●定例会：5月7日(月) 13:30～ 三輪センター・第三会議室 *定例会は‘わんりい’会員の皆さんはどなたでも参加できます。

●6月号‘わんりい’発送日5月31日(木) 10:30～ 三輪センター：第二・三会議室 *おたより発送日は弁当持参です